

移動とグローバル化の動態的様相

渡 辺 良 智

「一つの妖怪が世界を徘徊している—グローバル化という妖怪が。」この軽妙な表現は、現代世界の特徴をうまく捉えていると思われるが、言うまでもなく、K・マルクスとF・エンゲルスが、『共産党宣言』（1848年）において、「一つの妖怪がヨーロッパを徘徊している—共産主義という妖怪が」と言ったのを借用したものである。それはともかく、2人の指摘は、実に鋭いものであった。なぜなら、その後の人類の歴史において、共産主義という思想は、人類の歴史を動かす原動力の1つとなったからである。20世紀に入ると、1917年のロシアの革命に始まり、東欧、中国、アフリカ、中南米等で共産主義国家が成立し、共産圏が形成され、共産主義は一つの妖怪から1つの現実へと変身した。共産主義は資本主義に対抗しうる、20世紀の人類社会を動かす大きな力となった。第二次世界大戦後、これら2大イデオロギーはいずれが優れているかそして人類の未来の社会を担うのはいずれかをめぐって激しく競争した。この状態は東西対立と呼ばれた。しかし、1990年代に入ると共産主義は資本主義との競争に敗れ、ロシア、東欧の共産主義国家は崩壊し、これらの国は資本主義に復帰した。中国、ベトナム等は政治的には共産党一党独裁体制を維持しつつ経済は資本主義に変わった。

その後、世界を席卷した資本主義は、近代以降社会の基本単位であった国民国家の境界を越え、ボーダーレス化を促進し、多国籍企業、国際金融や国際貿易を中心に世界の一体化を進行させた。また、情報通信技術の大いなる発達によって世界は時間的・空間的に接近し、国際関係も緊密化した。移民（ヒト）、貿易（モノ）、国際金融（カネ）、国際ニュース（情報）などの動きも顕著になった。そして、環境問題や資源・水・食料問題、さらにはBSEや新インフルエンザなどの流行病対策も、地球規模に広がった。

ところで、人類の歴史を回顧すると、新大陸の発見以後20世紀まで、スペイン、イギリス、アメリカと覇権国は変わったものの、欧米が世界を支配してきた。新大陸というのもユーラシア・アフリカの旧大陸に対する表現である。20世紀の2度にわたる世界大戦は、世界の覇権をめぐって戦われたが、主戦場はヨーロッパであった。ところが、1970年代から21世紀にかけて、日本・中国・インド・南米の台頭、多国籍企業

と国際的 NGO の増加、イスラムの影響力の増大など、欧米の世界支配を脅かすような動きが目立つようになった。その一方、通信手段の発達、とくにインターネットの広がりとともに、英語は世界標準語化し、アメリカ文化を中心に、文化においても世界は画一化が進んでいる。ハリウッド映画とディズニーランドとマクドナルドに代表されるアメリカ文化が世界中に浸透し、世界各地の伝統文化との軋轢も生じている。

これら一連の世界規模の (global) 動きを表す globalization という英語は、日本では「地球規模化」とも訳されたが、「グローバリゼーション」という用語が広く用いられるようになった。そして、現在、「グローバリゼーションという一つの妖怪が世界を徘徊している」、と言うよりも、「グローバリゼーションという一つの妖怪が世界を呑み込んでいる」と言ってもあながち誇張でもないだろう。

だが、「グローバリゼーション」ないし「グローバル化」は、現代社会を表わすことばとして最も多く用いられていると思われるが、その定義は確定していない。一般的には、「国境を越えるヒト・モノ・カネそして情報や技術の動きの拡大」を意味し、そうした越境的な状況をさすことばとされている。最新の『広辞苑』第6版でも「国を超えて地球規模で交流や通商が拡大すること。世界全体にわたるようになること」と定義している。だが、これらの「移動」をこえる、グローバリゼーションの諸側面や世界の時間的・空間的縮小化、世界規模での相互依存関係の深化といったグローバリゼーションの影響を重視する論者もいる。そして、政治的次元、経済的次元、文化的次元、さらにはイデオロギー次元において、グローバリゼーションは考察の対象とされ、それらの影響を肯定的にみるか否定的にみるか、評価は分かれている。とにかく、グローバリゼーションとは、国民国家の国境を越えて世界規模の相互依存と交流を生じ、さらに世界の時間的空間的縮小を人々に意識させている、一連の社会的過程と考えられる。

2007年度から2008年度にかけて行われた当プロジェクトは、ヒト(移民)・情報(噂)・食習慣(食文化)の「移動」と「グローバル化戦略」を中心にグローバリゼーションの解明を試みてきた。それぞれの論文は、グローバリゼーションの個別テーマにアプローチしたものであり、グローバリゼーションの全容の解明には到底及んでいないが、とりあえず区切りの報告としたい。グローバリゼーションという巨大な妖怪に対して群盲象を撫でるに等しい結果に終わっているかもしれない。それでも、それらがグローバリゼーション研究に何らかの貢献ができたとすれば、そこに当プロジェクトに意義があったと考えられる。